まえがき

井上章一

昔の論文を読んで、その時代色をいやおうなく感じさせられることがある。この論文は、いかにも一九五〇年代製らしく、読める。こちらの論文は、たぶん二〇世紀末の仕事だろう。以上のように、その執筆年代がおしはかられる論文は、たくさんある。

ものによっては、どこの大学で勉強をした人の著述なのかも、読みとれる。いわゆる学統の気配がうかがえる論文も、少なくない。いくつかの指標から、そういったことのわかるケースは、しばしばある。

いっぱんに、研究者の書くものは、真理をめざしていると、考えられている。事実への探求欲だけに、それらはささえられていると、そうみなすのがふつうである。

しかし、多くの論文が、じっさいには時代の型に、論述ぶりを枠どられてきた。たとえば、一九五〇年代の論文は、一九五〇年代のスタイルに、そめあげられている。時代の鋳型からときはなたれた、自由な論文はあまりない。

また、たいていの論文は、大なり小なり学統の感化をうけている。あけすけに書けば、出身ゼミの色をおびているものである。たとえ、そこからの脱出をこころざしていたとしても。

ならば、われわれの書く論文なるものは、総体としてどのような拘束をうけているのか。何にしばられ、研究成果と称される文章は、書きつがれてきたのだろう。私は、そういったことどもが横断的に語りあえる場をもちたいと、ねがってきた。

二〇一二年度からは、それをつとめ先の国際日本文化研究センターに、もうけている。二〇一六年度までつづいた「人文諸学の科学史的研究」が、それである。この本は、そこをとおして、参加者たちがあらわした報告のまとめに、ほかならない。

じゅうらいの科学史研究は、自然科学がこうむる束縛のありかたを、さぐってきた。一見、価値中立的にうつる物理や化学も、じつはかくかくの社会情勢にうごかされている。国家の要請や資本からの支援が、こんなふうにからんできた、などなどと。

しかし、人文方面の学問が、そういう俎上にのることは、まずない。分析の対象となるのは、もっぱら自然諸学であった。

科学史の研究者が人文学に目をむけなかった事情は、わからなくもない。歴史や文学の研究が、しばしば時代の勢いにながされる。社会分析や経済学が、学統に左右されてしまう。そのことを、科学史の研究者たちは、しごくあたりまえの現象として、うけとめてきた。文化系なんて、そもそもそういうものなんだ、と。だから、わざわざ学問の被拘束性を問う気に、ならなかったのではないか。

その点で、物理や化学の対象となることどもは、社会の枠をこえているように見える。物理の法則や化学反応は、文化のありようにかかわりなく作動する。にもかかわらず、その「真理」へいどむ研究者の姿勢は、社会や文化の拘束をうけてきた。その意外性が、科学史の研究者たちをかりたててきたのだろう。そして、人文諸学には、そういう好奇心をそそる魅力が、なかったのだと考える。

二〇世紀のなかごろからは、人文系の学問も「人文科学」を自称するようになっている。「科学」なんだと、おさまりかえった身振りを、しめしだした。しかし、「人文科学」は、まだ科学史から相手をしてもらえるに、いたっていない。あるいは、「社会科学」でも。やはり、どこかでは見くびられているのだろう。

なるほど、人文学が時流や学統に左右されるのは、不思議でないのかもしれない。研究会での報告を聞いていても、そのことを思い知る。誰もが、つぎのような口調で、発表をしてくれたものである。

あの時代は、みんなああいう方向にながされたんだ。彼は○○先生のところで学んだから、こういう仕事になるのは、やむをえない。以上のように、事態を必然的にながめる発表が、多かったと思う。物理や化学とは、やはり学説史の論じようがちがっているなと、感じいる。じゅうらいの科学史が、こちらへ目をむけないのもいたしかたないと、思わないではない。

だが、おかげで、人文学の被拘束性は、問いただされないまま放置されやすくなる。これはこれで、こまったことになるのではなかろうか。やはり、学問が何にしばられるのかは、人文系でもはっきりあかされるべきであろう。

この本によせられた諸論考が、人文学の被拘束性総体をつきとめているとは、言えない。それらは、個別分野ごとの諸事情へ、ところどころ光をあてているにとどまる。全体的な展望がえがけているとは、言いきれないだろう。

だが、読めば、さまざまな発見があるのではないか。似たような学問史の展開なら、自分たちの分野にもあった。あの時代に、こういう議論がわきたったのは、うちの領域だけでもなかったんだな、と。そういう掘り起こしのひき金役を、この本がはたせればと、今はねがうしだいである。

この本を、私は四部にわけて、構成した。

第一部の諸論考は、明治以後、大日本帝国時代の人文諸学に、むきあっている。そこで成立したある型が、意外にながくたもたれた。あるいは、敗戦後にも尾をひいている様子が、それらを読むと、よくわかる。

第二部のものは、敗戦後の新しい展開を、大なり小なり批判的にふりかえっている。一時代を席捲した国民的

歴史学運動は、どう人文諸学を翻弄したか。あるいは、しなかったか。分野ごとの、もしくは学統による差異などが、うかがえる。

間奏となるコラムをへて、第三部ははじめられる。

私はながらく、明治維新や日本近代の解釈史に、興味をいだいてきた。とりわけ、維新で絶対王政が成立したとする、ひところの通説に関心をよせている。どうして、ああいうおかしな議論がなりたったのかというふうに。二〇世紀なかごろの学界情勢に、あの説をうかびあがらせる力学がはたらいた。その作動ぶりを、対談というかたちで、往時の生証人である竹村民郎氏にたずねている。時代が学問をとらえる、そのからくりにせまろうとする試みである。

その前後には、関連する私と竹村氏の論文を、おいている。それぞれに、竹村氏への聞きとりをおぎなう意味で、口はばったいが益するところはあろう。なお、私はここで書いた文章に、国際的な日本研究への志もふくませている。ずいぶん肩に力がはいっているけれども、何かを感じて下されば、うれしい。

第四部には、私のマニフェストめいた文章を、再録した。ひとつは時代の拘束を論じており、もうひとつは学統のしばりをとらえている。もうひとつと今のべた文章は、研究会への呼びかけにも利用した。今回論考をよせてくれたのは、これに呼応してくれた研究者たちである。

目次

まえがき

第一部◆大日本帝国の時代から

論　文　はたして言語学者はふがいないのか――日本語系統論の一断面　長田俊樹　010
論　文　帝国大学の創設と日本型社会科学の形成　瀧井一博　030
論　文　天心の「子ども」たち――日本美術史の思想はどう継承されたのか　藤原貞朗　053
論　考　「日本美術史」の形成と古都奈良・京都　高木博志　072
論　考　邪馬台国論争の超克――白鳥・津田史学からの脱却　小路田泰直　086
論　考　特高警察と民衆宗教の物語　永岡　崇　095
論　考　日本人起源論研究をしばってきたものごと　斎藤成也　110

第二部◆戦後の光景

論　文　エポックメイキングな歴史書
――大塚久雄・越智武臣・川北稔の歴史学　玉木俊明　130

論　文　〈国文学史〉の振幅と二つの戦後
　　――西洋・「世界文学」・風巻景次郎をめぐって　荒木　浩　145
論　文　民科とスターリン言語学　安田敏朗　165
論　考　中世史学史の点と線――石母田史学の挑戦　関　幸彦　186
論　考　戦後日本古代史学への雑考　若井敏明　201
論　考　学問への内外の規制――日本史学の場合　今谷　明　208

幕　間
コラム　共同研究の支え――樋口謹一の仕事　鶴見太郎　220
コラム　「教育勅語」と「十戒」雑感　上村敏文　223
コラム　角屋と桂離宮　井上章一　226
コラム　真理と自由、そして学会　井上章一　229

第三部◆戦後は明治をどうとらえたか
論　文　学問を、国という枠からときはなつ
　　――アメリカのフランス革命、ソビエトの明治維新、そして桑原武夫がたどった途　井上章一　234
対　談　明治絶対王政説とは何だったのか　竹村民郎×井上章一　254

論　文　二〇世紀初頭、天皇主義サンディカリズムの相剋
——北一輝・大川周明・安岡正篤・永田鉄山との関係に留意して　竹村民郎　299

第四部◆再録

論　考　『つくられた桂離宮神話』より　井上章一　330
論　考　歴史はどこまで学統・学閥に左右されるのか　井上章一　343

あとがき
研究会の記録
人名索引
執筆者紹介

研究会の発足を考えていたころに、私は『中央公論』から、原稿執筆の依頼をうけた。二〇一二年の一月号で、「人脈と権力」を特集するという。そこに、学閥のことを書いてほしいと、私はたのまれた。

渡りに船だとも思い、私は一文をまとめている。「歴史はどこまで学統・学閥に左右されるのか」という、再録の文章がそれである。研究会の趣旨説明にもつかえるとも考え、私はこれを書いた。また、研究会へ参加をしてほしいと想っていた研究者たちにも、その写しをおくっている。

本書にあつめられた文章を読んでいると、これを事実上たしなめているものもある。たとえば、若井論文は、邪馬台国論と学統のつながりを、私より消極的に見つもった。小路田論文は、若井論文とはちがう形で、つっぱしっている。読者にも、そのくいちがいを、ぜひたのしんでほしい。やはり、邪馬台国論は、いろいろな引き出しのある魅力的なテーマだなと、感じいる。

第一章には、大日本帝国時代の学問形成期へ光があてられたものを、ならべている。

まず、長田論文だが、これには苦笑せざるをえなかった。

日本語の起源はインドのタミール語だとする説がある。国語学者の大野晋がとなえて、有名になった説である。これを否定する長田は、その大野に直接論戦をいどんだことがある。大野を日文研へまねき、それがはたして学問的になりたつか否かを、論じあった。

両者のやりとりを見くらべ、私は大野に当日の軍配をあげている。とにかく、声のはり、大きさ、相手をのみ

こむ勢いが、圧倒的であった。討論の終了後も、大野は意気揚々たる様子を、くずさない。学術面の当否はさておき、場を見たかぎりの印象では、長田らがおされていた。

私は、あとでそのことをなじっている。ああして圧倒されるだけだと、言語学は社会から見すてられる。それでいいのか。スタンドプレーでもやりあえる技を、みがくべきではないのか、と。

今回の長田論文は、言語学の非力ぶりが明治以来のものであることを、えがきだす。それだけ純度の高い、科学的な分野であるということなのだろうか。

瀧井論文は、明治期の国家学会成立へ、光をあてている。「国家学」という字面の印象にも、目をくらまされているせいだろう。あと、東京帝国大学の法学者がつどったという経緯へ、偏見をいだいたせいかもしれない。私は、これを大日本帝国の国家主義が語りあわれた組織だと、なんとなく思ってきた。

誰しもがいだきかねないそんな想いを、瀧井論文はくずしていく。この学会がもっていた、べつの可能性をほりおこした。その後もつづいた国家学会のことを考えるさいに、はずせぬ論文だと推薦する。

藤原論文は、美術史にいどんでいる。いっぱんに、大学の美術史研究は岡倉天心の史観をしりぞけ成立したと、されてきた。だが、藤原論文は、天心以後の美術史も、天心の枠をこえていないと、見きわめる。

この一見とっぴな着眼は、アンリ・フォションの美術史を読むことで、浮上した。外国の研究が、意外なところで日本国内の盲点を、あらわにしてくれる。国際的な日本研究には、やはり可能性があると、そう意を強くしたしだいである。

高木論文は、古美術評価の近代をふりかえる。京都や奈良の古美術は、近代日本国家の形成により、その論じられ方をかえていく。平等院の鳳凰堂にひそむ意外な明治国家の影が、よくわかる。

ちっぽけな指摘だが、あえてこだわる。一八九三年のシカゴ万博に、日本政府は日本館としてホーオーデンを、

たてている。平等院の鳳凰堂をまねたと、多くの記録にはしるされてきた。文献史家の高木も、これにしたがい「鳳凰堂を模した……意匠であった」と、書く。

しかし、若いころに建築をまなんだ私は、これが鳳凰堂を手本にしていると思えない。「意匠」はべつものだと、考える。どうやら、私は建築学にしばられ、高木は文献史学の拘束をうけているらしい。分野がちがえば、真理もちがってくるという、その好例であろう。

小路田論文は、邪馬台国＝九州説にくみする人々を、いらだたせるかもしれない。しかし、九州説が明治以後の民族的な情熱にささえられているという指摘は、重要である。なるほど、言われてみれば、私のなかにもこの想いがないではないと、思い知らされた。

永岡論文は、大本教研究の戦前戦後を比較する。そして、両者が意外なところでつうじあっていることを、あばきだす。いっぱんに、戦後史学は戦後の情熱にあおられ成立したと、みなされよう。しかし、これを読めば、またちがった角度からの史学史もありうることが、よくわかる。

斎藤論文は、日本人起源論の系譜を、一九世紀からたどっていく。自然人類学の学説史で、研究者たちの人間味をうかびあがらせている点が、興味深い。アイヌと沖縄の同系説も、ある時期までは素朴な段階に、とどまっていた。けっきょくは、ベルツのそれを反復していたんだという指摘には、考えさせられる。私も、うすうすそうじゃあないかと、感じていただけに、心強い。

第二部には、戦後の諸状況へ目をむけた論考をあつめている。

玉木論文には、イギリス近代史の読みときがかわっていく様子を、おしえられた。イギリスには、アントワープに従属させられていた時期がある。このことを、大塚久雄や戦後史学はとらえそこなっていた。のみならず、それに対抗した越智武臣も見おとしていたという指摘は、重い。

私も、川北稔があらわした『工業化の歴史的前提』は、手元においている。しかし、この問題とかかわる形では、読んでこなかった。ありていに言えば、読みそこなってきたのだと思う。そのことを、玉木論文には痛感させられた。川北の仕事には、あらためてむきあいたいと、今は思っている。

荒木論文は、国文学研究の戦後史から、興味深いエピソードをほりおこしている。これを読み、彼らのいだく西洋像におどろかされた。とんでもない想いを、彼地にはいだいていたんだなと、かみしめる。

日文研の創設に力をつくした桑原武夫は、しばしば国文学に否定的な口吻をしめしていた。彼らは外国を、西洋をぜんぜん知らない、と。荒木論文を読むと、そんな物言いも、まんざら的ははずしていなかったんだと思う。

安田論文は、戦後史学を左右したスターリン言語学に、光をあてている。私はながらく、これがいわゆる「国民的歴史学運動」をあとおししたのだと、とらえてきた。もっぱら、スターリンのかけた発破（はっぱ）が、共産党所感派を民族主義へはしらせたという文脈で。

だが、そのいっぽうで、標準語を正当化する石母田正らの議論も、これはささえている。方言を消極的にとらえる拠り所となったことが、よくわかった。京都は、京都弁の街だが、日本の歴史に不要な街である。そう言いきった石母田のことを、あらためて考えなおしたくなった。

その石母田の学史的な位置づけを、関論文はえがいている。いわゆる正統アカデミズムにたいする石母田の挑戦を論じたところでは、虚をつかれた。なるほど、「国民的歴史学運動」をへた後の石母田には、こんな一面もあったのか。そこを、深く考えさせられた。

私はふだんから、石母田ぎらいを、よく口にする。そんな私に、石母田の可能性をしめしてくれた論考としても、うけとめた。

若井論文は、学界渡世のさまざまなしがらみを、味わい深く書いている。田中卓や長山泰孝の例をひきながら、

戦後史学の不自由な面を、うかびあがらせた。論文の採否を、内容ではなく体裁で判断する学会のありかたに、考えさせられる。

今谷論文は、明治以後の史学史を論じている。杓子定規に色分けをすれば、第一部へくみこまれるべきであったろう。だが、これも戦後史学のかかえた問題を、対比的にうかびあがらせている。戦後の歴史学をふりかえる好個の読み物だと考え、ここへ収録したしだいである。

第三部には、私と竹村氏の対談をおさめた。そこで、二人はいわゆる戦後史学の拘束力、そして脱出への糸口を語り合っている。

二〇世紀のなかごろを史学史的にふりかえる読み物は、少なくない。多くの書き手がいろいろな回想をのべている。だが、その束縛ぶりに、ここまでふみこんだやりとりは多くない。

ほんとうのことを言えば、大学の人事にもそれがおよんでいたことまで、論じたかった。あるいは、出版社の編集部にさえ、少なからぬ影をおとしていた場合があったことも。

だが、そういった点になると、私もたしかな裏をとる自信はない。また、かりにそこをつかんでいたとしても、書きされたかどうかは疑問である。束縛からの解放をめざす。そう見栄をきった私にも、どうやらためらうところはあるらしい。やはり、学問世界の片隅で生息している以上、自由にはなりきれないようである。

とはいえ、明治絶対王政説をなりたたせていた学界のからくりは、あばきだせたと思う。そして、こういう仕掛けはいつでも、形こそちがえ、私たちにおよぶ可能性がある。自分たちは、今何にしばられているのだろうか。そこを自問自答しつつ読んでいただければ、ありがたい。

むすびのところへは、以前に書いた文章を、ならべてのせた。『学問をしばるもの』へとむかう、私の志をのべたものである。かたほうは時代の拘束、そしてもういっぽうは学統のそれを論じている。いずれにも、われな

がらあつかましい言い方だが、力はこもっていると考え、再録した。
新しいマニフェストが書ききれなかった自分を、少々ふがいなく思っている。

井上　章一

人名索引

採録語句が章・節・項のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にし、その章・節・項内からは採録を省略した。

あ

アイザックス、H　266
相沢三郎　320, 322
赤池濃　315
アゴスティ、A　297
朝河貫一　188
浅野晃　54
浅野和三郎　99
飛鳥井雅道　220, 251
アバエフ、V　173
網野善彦　201
綾川武治　310, 315
新井白石　187, 193
荒木貞夫　318
荒畑寒村　256

い

池田亀鑑　150
池田成彬　320, 323
池田次郎　117〜119, 122
池袋正釟郎　315
石井進　198, 347〜349
石井良助　214
石黒忠篤　265
石田雄　45
石堂清倫　297
石母田正　159, **174**, 178, **186**, 293
板垣征四郎　310
伊藤晃　293
伊東忠太　54
伊藤博文　37, 39, 41, 78, 80
伊藤光晴　265
稲賀繁美　54, 55, 57, 61, 298
乾孝　95
犬養毅　212, 319
井上馨　37
井上清　244〜246, 289〜292, 295, 296

井上毅　225
井上準之助　308
井上章一　11, 28, 54, 55, 57, 60, 73, 226, 334
井上哲次郎　58, 59
井上日召　315, 319
井上晴丸　265
井上光貞　202, 343〜345
猪保津南雄　256
今井清一　275
今谷明　206
今西錦司　220
伊牟田経久　146
岩井忠熊　244
岩倉具視　38, 78, 79, 277
岩崎弥太郎　283, 284
岩波茂雄　213
岩本通弥　84
う
ヴァイトマン、S　235
ヴァレリイ、P　158
ウェーバー、M　134, 137, 140, 152, 214, 282, 287, 339
植木哲也　123
上田万年　11, 15, 93, 178
上田喜三郎　→出口王仁三郎
上山春平　260
内田銀蔵　209, 214
内田光子　349
梅棹忠夫　251
梅原猛　251, 252
え
エイドゥス、ハ・テ　252, 253, 289, 290, 292, 295
榎一雄　202
榎本武揚　36
エリザベス女王　297
エンゲルス、F　96, 258, 260
遠藤輝明　262
お
大内力　259
大内兵衛　256
大川周明　**299**, **308**
大久保忠利　170
大久保利通　277, 283
大隈重信　37, 211
大倉喜八郎　283
大島清　259
大島義夫(高木弘)　173, **178**, 179
大塚健洋　312
大塚久雄　**130**, 280〜282
大野晋　10, 11, 23, **24**, 27, 28
大姫　350

岡倉覚三（天心） **53**, 80〜83
岡崎義恵 152, 153
岡田啓介 213, 301, 320, 324
岡村寧次 310, 321
小川琢治 63
奥田靖雄 177, 178
小口偉一 95
奥野高広 215
小倉正恒 320
織田信長 279
越智武臣 **130**
小野武夫 265
小畑敏四郎 321
尾本惠市 119, 120, 122

か

カール大帝 189
カウツキー、K 258, 260, 286, 287
垣内松三 149, 150
柿本奨 146
笠木良明 303, 310, 315
風巻景次郎 **145**, **155**, **160**
風巻春子 161
香椎浩平 302
梶西光速 259
加藤俊彦 259
門脇禎二 203, 346
金岡 81
金関丈夫 117, 121
金子堅太郎 41〜44, 46
狩野直喜 63, 220
狩野芳崖 56
鹿子木員信 303
亀井勝一郎 215
亀井俊郎 324
亀田次郎 **19**, 21〜23
河井継之助 318
川北稔 **130**
河野健二 244, 245, 262
川村信秀 123

き

北一輝 **299**, **303**
喜田貞吉 209, 211, 212
北白川宮能久 36
北畠親房 211
北山茂夫 344
木戸孝允 277
木下順二 174〜177
ギボン、E 208, 209
木村礎 215, 216
清野謙次 114, 115

金田一京助　93
金田一春彦　173
金日成　165
く
杭迫軍二　98〜105
クーシネン、O　278
九鬼隆一　80, 83
櫛田民蔵　256
朽木ゆり子　72
久米邦武　210
蔵原惟人　179, 180
グラムシ、A　261, 297
倉持治休　210
栗原百寿　265
黒板勝美　209
黒田俊雄　198, 347〜349
桑原武夫　132, 220〜222, **234**, **242**, 260〜262, 264
け
継体天皇　79
ゲーテ、W　72
ケマル、M　312
こ
小泉信三　217
小磯国昭　310
郷誠之助　320
幸田成友　209
河野司　301, 302
河野与一　220
孝明天皇　75, 77
川本大作　310
小金井良精　113
黒正巌　214
児島高徳　210
後白河上皇　350
小平権一　265
後藤新平　314
後藤文夫　318, 324
後藤靖　272, 273
後鳥羽上皇　347
近衛文麿　318
小林潔　168
小林行雄　343〜346
小林良彰　260, 261
小藤恵　302
小松原英太郎　212
後村上天皇　211
今日出海　247, 248
コンラッド、N　253, 295
さ
西郷隆盛　241, 276

斎藤清衛　152, 153, 155
斎藤忠　203
斎藤成也　114
斎藤実　320, 324
斎藤隆三　59
佐伯有清　345, 346
佐伯梅友　146
酒井忠正　315, 318
堺利彦　256
栄原永遠男　202
榊亮三郎　220
坂口昂　73
坂野徹　124
坂本太郎　202, 203
坂本竜馬　283
佐木秋夫　95, 97, 106, 107
向坂逸郎　256
桜井義肇　19
佐藤進一　192, 193, 214, 215, 351
佐藤道信　72, 80
ザビエル、F　225
サンジェーエフ　166
三条実美　78, 277

し

シーボルト、H　112
シーボルト、P・F　112
シェーラー、M　340
志賀義雄　266, 267
重野安繹　210
ジッド、A　**246**, 263
篠田謙一　122
信夫清三郎　284
司馬光　211
芝原拓自　244
島津忠夫　154
清水三男　195〜198
シャルル一〇世　263
ジャンセン、M・B　240
シューベルト、F　349
庄垣内正弘　11
定朝　81
ジョクール、L　222
ジョレス、J　237
ジョンソン、C　235
シラー、F　72
白井光太郎　113
白石正一郎　283
白鳥庫吉　**86**, **90**, 202, 212, 345
シンケル、K　72
神武天皇　74, 75

新村出　12, 14〜17, 19, 21, 23
す
末松謙澄　79
末松保和　202, 345, 346
杉本秀太郎　220, 252
鈴木尚　115〜118, 122
鈴木博之　336
鈴木茂三郎　256
スターリン、I　**165, 166,** 248, 313
ストーン、R　235
スピリドヴィッチ、E・F　173
スペンサー、H　39
住谷一彦　265
スラッファー、P　261
せ
関野貞　63, 84
そ
ソシュール、F　169, 170
ゾンバルト、W　287
孫文　307, 312
た
ダーントン、R　235
平将門　350
高木弘　→大島義夫
高木博志　74, 84
タカクラ・テル　179, 180
高杉晋作　283
高津鍬三郎　150
高野真毅　41〜43
高橋健三　58
高橋幸八郎　262
高橋是清　269, 301
高橋義孝　151, 161, 162
瀧井一博　296
瀧精一　54, **55,** 62, 63, 65, 67
田口卯吉　12, **13, 15, 17,** 21, 27, 189, 190, 210, 211
竹内理三　202, 215
竹越与三郎　189, 238
竹村民郎　289
多田駿　310
多田道太郎　220
田中克彦　166, 168, 174, 179, 181
田中惣五郎　323
田中卓　203〜205
田中義成　212
田部京子　349
ダワー、J　295
譚人鳳　307
ち
千倉武夫　315

長幸男　265
つ
辻善之助　209
津田左右吉　75, **86**, 203, 212, 213
土屋喬雄　256, 257
角山榮　134, 135, 215, 280
坪井正五郎　113, 114, 123, 124
鶴見左吉雄　315
鶴見俊輔　250, 251
て
ディドロ、D　222
ディミトロフ、G　248
テイルトマン、H　302
出口王仁三郎(上田喜三郎)　99, 102〜105
出口なお　97, 99〜102, 104
寺内正毅　299
寺田一夫　114
と
土肥原賢二　310
土居光知　149, 150
東条英機　308, 323
藤間生大　293
トーニー、R・H　135, 138
遠山茂樹　289, 290
時枝誠記　**168**, 181
徳川家達　284
徳川綱吉　74
徳川慶喜　241, 284
徳大寺実則　34
徳田球一　266, 267
徳富蘇峰　238
戸坂潤　97
百々幸雄　118, 120, 121
利根川裕　301
富岡謙蔵　63
富永仲基　341
豊臣秀吉　279
鳥居龍蔵　63, 93, 114〜116, 124
トルーマン、H　165
な
内藤昌　330, 331
内藤湖南　63, 88, 93, 203, 341, 345
直木孝次郎　204
永井荷風　162
永井昌文　121
中尾佐助　27
中木康夫　262
中島久万吉　320
中田薫　188, 192, 194〜196, 199, 214
永田鉄山　**299**, **320**

中谷武世　304, 308, 310, 315
中野実　35
中橋孝博　121
永原慶二　190
中村古峡　101〜103
中村正直　225
中村政則　272
中山みき　97
長山泰孝　205〜207
ナポレオン、B　275
奈良本辰也　245, 254, 277, 278, 294
に
ニーブール、B・G　209
西田税　310, 315
西村茂樹　34
ね
根井正利　122
の
ノーマン、E・H　294〜296
野坂参三　267, 270, 296
野呂栄太郎　258
は
ハイネ、H　159
パヴロフ、I　171
袴田里見　267
バクスター、R　137
橋本雅邦　56
橋本清之助　318
橋本勝　11
長谷部言人　115, 116, 118
服部之総　258, 284, 294
服部四郎　24, 25, 173
羽仁五郎　264
埴原和郎　118〜122, 230
浜尾新　59
濱田耕作　**61**, 67
林洗十郎　322
林基　291, 292
林屋辰三郎　227, 228
原勝郎　209
原口清　272, 273
原秀三郎　203
原敬　212, 299
ハント、L　235
ひ
ビーン、D　235
220
樋口謹一　114
樋口隆康　202
肥後和男　305
土方和雄　305

菱田春草　81
菱山泉　261
ビスマルク、O　272
ヒトラー、A　272, 300
ヒューム、D　208, 209
平井金三　**19**, 21, 23, 27
平泉澄　203, 204, 213, 217
平野義太郎　260, 262, 264, 281
ヒル、C　281
広田弘毅　323
ひろたまさき　106
ふ
ブイコフスキー、S・N　173
フィッシャー、F・J　135, 137〜139
フーコー、M　340, 341
フーレル、N　166
フェノロサ、E　56, 73
フォシヨン、H　53〜57, 67
福沢諭吉　37, 186, 189, 190
福田徳三　214, 217
福田秀一　154
藤岡勝二　12, 14〜19, **21**
藤岡通夫　228
藤田五郎　284
藤原彰　275
フュレ、F　235
フランツヨーゼフ一世　78
フリードリヒ大王　271, 272
ブルデュー、P　340, 341
フロイト、G　24
へ
ベールキン、D　166
ペリー、M　279
ベルンシュタイン、E　286, 287
ベルツ、E　113, 119, 122
ベンサム、J　39
ほ
宝来聰　121
ホール、J・W　240
ポッペ、N　171, 172
堀江英一　258, 281
堀江保蔵　215
堀米庸三　349
ホロポフ、A　166, 179
本庄栄治郎　214, 215, 281, 282
ま
牧健二　192, 195〜198, 202
牧野伸顕　314
槇村正直　77
真崎甚三郎　320, 322

マチエ、A　237
町田辰次郎　318
松尾尊兊　296, 297, 344
松島栄一　95
松平定信　196
松村博文　115
松村瞭　115
松本新八郎　293
松本学　318
マホメット　309
マル（マール）、N　166〜168, **170**, 172〜174, 180
マルクス、K　176, 264, 282, 286〜288
マルサス、T　139
丸谷才一　145
丸山眞男　45, 186, 213, 294, 296
マルロー、A　**246**, 263
マントノン侯爵夫人　276
マンハイム、K　340, 341

み

三浦周行　209
三上参次　150
道綱母　147, 148
満川亀太郎　303, 308〜310, 313, 315
皆川完一　202
源頼朝　187, 188, 195, 350, 351
峰間鹿水　212
蓑田胸喜　213, 214, 217, 313
美濃部達吉　47, 213, 305
三宅米吉　123
宮崎道三郎　214
宮地正人　229
宮本顕治　267
宮本又次　215, 281, 282
ミュラー、M　14, 18
ミル、J　39
ミルン、J　112

む

ムッソリーニ、B　300
村尾次郎　204
村形明子　73
村上重良　95, 96
村上呂里　178
村山七郎　26, 171, 172

め

明治天皇　77, 85, 225
メシチャニーノフ、I・I　172
メンデレーフ、D　171

も

モース、E　112
モールトン、R・G　149

望田幸男　132
茂木威一　170
桃裕行　202, 215
森有礼　**30, 31**, 35
森浩一　203, 344, 345
森外三郎　220
モンテスパン侯爵夫人　276

や

矢口孝次郎　134, 280
安岡正篤　**299, 314**
安田善四郎　315
安田善次郎　284
安田徳太郎　23〜27
保田与重郎　54
安丸良夫　106, 244, 251
安本美典　202
柳田國男　159
柳原前光　78
山県有朋　37, 212
山川均　256
山口敏　113〜115, 118, 119, 121
山崎春成　265
山下奉文　302
山田稔　220
山田盛太郎　260, 262, 264

ゆ

結城豊太郎　315
湯本文彦　83
由利公正　283

よ

横田健一　204
横光利一　157
横山大観　67, 81
吉田茂　318, 324
吉田松陰　277
吉田精一　152
吉田伸之　229, 230
吉永進一　19
吉野作造　47, 213
吉野瑞恵　149, 151
ヨッフェ、A　314
四元義隆　315

ら

ライシャワー、E　240, 295
ラビット、J　299, 300
ランケ、L　74, 209, 210

り

リース、L　74, 209, 210, 214
劉少奇　270
リルケ、R　162

る
ルイ一四世　276, 297
ルイ一六世　241
ルイ・フィリップ　263
ルーテル、M　308
ルクセンブルク、R　286, 287
ルソー、J　249
れ
レーニン、V　264
ろ
ロベスピエール、M　241, 259
わ
若槻礼次郎　319
和歌森太郎　202
渡辺恒夫　271
渡邉洪基　33, 34, **35**, 39, 40, 46
渡辺実　146〜148
渡部義通　281, 293
和辻哲郎　145, 155, 213

執筆者紹介（生年順、＊は編者）

竹村民郎（たけむら・たみお）

一九二九年・大阪府生／立命館大学文学部卒業／国際日本文化研究センター共同研究員／『関西モダニズム再考』（編著　思文閣出版　2008年）、『竹村民郎著作集Ⅰ～Ⅴ』（三元社　2015年）

今谷　明（いまたに・あきら）

一九四二年・京都府生／京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学／文学博士／帝京大学文学部特任教授／『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店　1985年）、『室町の王権』（中央公論新社　1990年）

関　幸彦（せき・ゆきひこ）

一九五二年・北海道生／学習院大学大学院人文科学研究科博士後期満期退学／日本大学文理学部教授／『その後の東国武士団――源平合戦以後――』（吉川弘文館　2011年）、『恋する武士　闘う貴族――』（山川出版社　2015年）

長田俊樹（おさだ・としき）

一九五四年・兵庫県生／ラーンチー大学部族地域学科博士号（Ph.D.）取得／博士（Ph.D.）／総合地球環境学研究所名誉教授・国際日本文化研究センター客員教授／『インダス文明の謎――古代文明神話を見直す』（京都大学学術出版会 2013 年）、『日本語系統論の現在』（共同編集 国際日本文化研究センター 2003 年）

小路田泰直（こじた・やすなお）

一九五四年・兵庫県生／京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学／修士（文学）／奈良女子大学文学部教授・副学長／『「邪馬台国」と日本人』（平凡社新書 2001 年）、『日本史論――黒潮と大和の地平から』（敬文舎 2017 年）

＊井上章一（いのうえ・しょういち）

一九五五年・京都府生／京都大学大学院工学研究科修士課程修了／工学修士／国際日本文化研究センター教授／『日本に古代はあったのか』（角川学芸出版 2008 年）、『伊勢神宮と日本美』（講談社 2013 年）

斎藤成也（さいとう・なるや）

一九五七年・福井県生／東京大学大学院理学系研究科人類学専攻修士課程修了、テキサス大学ヒューストン校生物医科学大学院修了／Ph. D.（テキサス大学）、博士（理・東京大学）／国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授／『日本列島人の歴史』（岩波書店 2015 年）、『歴誌主義宣言』（ウェッジ 2016 年）

若井敏明（わかい・としあき）

一九五八年・奈良県生／関西大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学／博士（文学）／関西大学・佛教大学・神戸市外国語大学非常勤講師／『平泉澄』（日本評伝選 ミネルヴァ書房 2006 年）、『「神話」から読み直す古代天皇史』（洋泉社 2017 年）

荒木　浩（あらき・ひろし）

一九五九年・新潟県生／京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退／博士（文学）／国際日本文化研究センター教授／『かくして『源氏物語』が誕生する――物語が流動する現場にどう立ち会うか――』（笠間書院 2014 年）、『徒然草への途――中世びとの心とことば――』（勉誠出版 2016 年）

上村敏文（うえむら・としふみ）

一九五九年・山口県生／筑波大学大学院地域研究科日本研究修士課程修了／国際学修士・神学修士／ルーテル学院大学総合人間学部准教授／『日本の近代化とプロテスタンティズム』（共編 教文館 2013 年）、「幕末から明治、後期水戸学「影」の具現者――久米幹文を中心として」（笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版 2015 年）

高木博志（たかぎ・ひろし）

一九五九年・大阪府生／立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学／博士（文学）／京都大学人文科学研究所教授／『近代天皇制の文化史的研究――天皇就任儀礼・年中行事・文化財』（校倉書房 1997 年）、『近代天皇制と古都』（岩波書店 2006 年）

玉木俊明（たまき・としあき）

一九六四年・大阪府生／同志社大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学／博士（文学）／京都産業大学経済学部教授／『北方ヨーロッパの商業と経済 1550―1815年』（知泉書館 2008年）、『海洋帝国興隆史――ヨーロッパ・海・近代世界システム――』（講談社選書メチエ 2014年）

鶴見太郎（つるみ・たろう）

一九六五年・京都府生／京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了／博士（文学）／早稲田大学文学学術院教授／『柳田国男入門』（角川選書 2008年）、『座談の思想』（新潮選書 2013年）

瀧井一博（たきい・かずひろ）

一九六七年・福岡県生／京都大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学／博士（法学）／国際日本文化研究センター教授／『伊藤博文』（中公新書 2010年）、『渡邉洪基』（ミネルヴァ書房 2016年）

藤原貞朗（ふじはら・さだお）

一九六七年・大阪府生／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学／修士（文学）／茨城大学人文社会科学部教授／『オリエンタリストの憂鬱――植民地主義時代のアンコール遺跡の考古学とフランスの東洋学者』（めこん 2008年）、『山下清と昭和の美術――「裸の大将」の神話を超えて――』（共著 名古屋大学出版会 2014年）

安田敏朗（やすだ・としあき）

一九六八年・神奈川県生／東京大学大学院総合文化研究科博士課程学位取得修了／博士（学術）／一橋大学大学院言語社会研究科准教授／『「国語」の近代史』（中公新書 2006 年）、『漢字廃止の思想史』（平凡社 2016 年）

永岡　崇（ながおか・たかし）

一九八一年・奈良県生／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学／博士（文学）／日本学術振興会特別研究員／『新宗教と総力戦――教祖以後を生きる』（名古屋大学出版会 2015 年）、「宗教文化は誰のものか――『大本七十年史』編纂事業をめぐって」（『日本研究』47 集 2013 年）

学問（がくもん）をしばるもの

２０１７（平成２９）年10月31日発行

編　者　井上章一
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒６０５-００８９　京都市東山区元町３５５
電話　０７５-５３３-６８６０（代表）

デザイン　関岡裕之
印刷製本　株式会社　図書印刷　同朋舎
© S. Inoue 2017
ISBN 978-4-7842-1898-1
C1020